

第9回 東南アジア分科会 議事録

日時： 2008年6月16日 15:00 - 17:00

場所： 東京文化財研究所 第1会議室

出席者(敬称略)： 上野邦一、坪井善明、中川武(以上、東南アジア分科会委員)

田中和彦(特別講師、上智大学)

関泉(外務省)田中健太郎、濱田泰栄(以上、文化庁)

井上和人、杉山洋、石村智、佐藤由以(以上、奈良文化財研究所)清水真一、二神葉子(以上、東京文化財研究所)、青木繁夫、豊島久乃、田代亜紀子、谷口仁(以上、コンソシアム事務局)

1. 西トップ寺院の保存修復事業について(私案)

杉山洋(奈良文化財研究所)

報告:カンボジアにおける文化遺産国際協力事業として、バンテアイ・クデイ寺院調査、1995年からはタニ窯跡共同調査を行ってきた。タニ窯跡では1997年から地形測量を実施、1999年～2000年にA群を発掘(B群は上智大学)。現在、外務省の草の根文化無償により、カンボジアにおいて初めてとなるサイト・ミュージアムが建設中である。

アンコール・トム内の西トップ寺院調査については、第1フェーズ(平成14年～17年)が終了し、現在は第2フェーズ(平成18年～22年)にあたる。第2フェーズでは寺院保存のためのマスタープラン作成を目指している。これまでの調査成果として、建立時代、寺院構成についてなどが明らかになってきた。当初中央祠堂上部から生えていた木はアップサラ機構が取り除いていたが、今年5月に塔上部に残っていた根の部分が落下し、中央祠堂前面破風の一部分が破損した。このような状況から、寺院の修復も考えなければいけない。

2008年5月には民間企業タダノによりカーボクレーンとスーパーデッキの2台が贈与され、現地での記念式典が2008年6月11日に催された。これは日本隊に対しての供与であるので、現地で活動を続ける上智大学アンコール遺跡国際調査団、JASSA、奈良文化財研究所などが使用できるようになっている。

今後の予定は、まず前面部分の落下により中央祠堂の屋根部分が不安定であるのでサポートをいれる必要がある。そのために8月に足場を組む予定である。第2フェーズ以降は私案であるが、第3フェーズ、第4フェーズ、各5年計10年間の修復計画を考えている。そのなかで、中央南北の3祠堂解体、仮積み、確認、基壇の解体・再構築、3祠堂の再構築、前面東側のテラスを解体・再構築、周辺整備、報告書作成、サイト・ミュージアム整備などを組み込んでいる。しかし、資金面、体制などで課題を抱えているので、各関係機関にはご協力願いたい。

2. フィリピンにおける文化遺産国際協力

田中和彦（上智大学アジア文化研究所非常勤講師）

報告: フィリピンにおける日本人考古学者による活動について、特に最近の3つの調査を中心に紹介する。東京外国語大学小川英文氏によるルソン島北部のラロ貝塚群の調査、有田町歴史民俗資料館の野上建紀氏による肥前磁器について研究、台湾在住の日本人研究者である台湾中央研究院地球科学研究所の飯塚義之氏によるフィリピンにおける台湾玉の調査である。

[ラロ貝塚群の調査] ルソン島北部で1971年に発見されたラロ貝塚群は、小川氏を中心に日本人考古学者により継続的発掘調査が行われている。主に科学研究費によって研究が続けているが、近年、ニワトリの飼料として貝殻の需要があるために地域の人々によっていくつかの貝塚が破壊され貝殻が売られてしまっているという保存の問題がある。**[肥前磁器についての調査]** 1650年代～18世紀後半のものがフィリピンで出土しており、出土した肥前磁器について2005年からフィリピン国立博物館館長と野上氏との間で同意書が結ばれ、3ヵ年計画で共同研究がおこなわれている。肥前磁器については、メキシコでも同型のものが発見され、ガレオン船によってマニラから運ばれた可能性が高くなっている。**[台湾玉についての調査]** 飯塚氏のフィリピン出土の台湾玉の研究がおこなわれている。科学分析により台湾玉の同定が可能となっている。

- ・ 現地の考古学者は参加しているのか。

→ 現在は共同調査ということで、フィリピン側と一緒に発掘調査をしなければならない。しかし、ラロ貝塚群については、1995～1997年の段階では、フィリピン人側の参加が国立博物館の調査官と彼の率いる1チーム（画官1名、技官1名ないし2名、運転手1名）であったが、2箇所の貝塚を同時に調査することがあったため、フィリピン人側の調査官とそのチームの大半が参加できたのは、1箇所に留まり、もう一箇所の貝塚調査には、フィリピン人技官1名のみでの参加に留まることがあったが、近年は、2人の調査官と2つのチームに参加して頂いて調査を進めている。参加者のなかには九州大学大学院博士後期課程に留学しているフィリピン人もいる。野上氏の肥前磁器研究については、フィリピンから2名参加してもらっている。2010年には「世界に輸出された肥前磁器」というテーマでのシンポジウムを開催する予定であり、2名を招聘して発表してもらう予定である。飯塚氏のプロジェクトでもフィリピンの学者が参加しているが、どのような形で参加しているかはわからない。

- ・ 考古学以外のフィリピンにおけるプロジェクトについてはあるのか。

→ 建築については国際協力プロジェクトがあるようだが、日本人専門家がそこにどのように関わ

っているのかは把握していない。

- ・ 遺跡の保護制度、また、発掘許可についてはどうなっているのか。

→ 発掘許可は国立博物館より共同調査という形である。遺物なども博物館に登録するようになっている。保護の問題については、発掘している地域に日本軍が居たということもあり、地域の人々の理解を得るのが難しい。盗掘などがおこなわれることもある。

3. タンロン皇城遺跡に関する支援報告

井上和人(奈良文化財研究所)

報告:2002年にハノイの中心部である国会議事堂建設予定地から大規模な遺構が発見された。そのタンロン皇城遺跡保存については、日本とベトナム政府の間で日越専門委員会が立ち上げられ支援事業がおこなわれてきた。2008年5月の遺構精査作業は、D地区(50m x 40mほど)を対象に行った。隣の地域では現在新国会議事堂建設のための発掘調査が2008年3月から10月の期間で行われている。ベトナム側は2010年にタンロン皇城遺跡の世界遺産登録を目指しており、2008年8月には申請のための遺跡についての報告書を提出しなければならないとのことである。今回の支援では、D地区における李王朝期以前の時代、李王朝前期・中期・後期、陳王朝期、陳王朝期以降の以降という変遷が明らかになった。2008年2月におこなったA、B地区の調査報告については既に日本語で報告書を作成し、ベトナム語に翻訳したうえでベトナム側へ手渡している。今回のD地区についても、報告書を同じようにベトナム語にしたうえでベトナム側に提出する予定である。A、B地区では、李朝の時代には建物の配置に変化がないが、D地区については李朝時代でも3時期の変遷をたどっている。このように遺構から、A、B、D地区それぞれの特徴がみられると同時に、これらの地域が宗教・政治的に非常に重要な一画であったと考えられる。現地調査時には遺構精査についてベトナム側若手研究者に対しての研修を連日行い、最終日にはベトナム歴史学者であるファン・ヒーレ教授もふくめたベトナム側に成果を報告した。

・国会建設については、100メートルの拡張を国が計画しており、これに対してファン・ヒーレ教授が代表する歴史学会はこれに強く反対している。また、現在ベトナムはインフレがすすんでおり、急遽日本銀行の役員が名誉総裁としてベトナム入りしている。経済危機の深刻化が進んでおり、ガソリン、米代が高騰している。このような社会的背景が、タンロン皇城遺跡保存についてのプロジェクトがどのように反映するかはわからないが、2010年7月の世界遺産登録を目指している動きがいろいろな所で滞っている面があるのも事実である。

・C地区へ国会建設予定地を拡張するという話は3月にでており、このC地区については、八角形の建物、北側に大きな建造物跡が確認できる非常に重要な地区であるので、予定地が拡張されるのは大きな問題であると考えている。

・八角形の塔については、まだ詳細は検出されているわけではないが、非常に重要な遺構であることは間違いない。

・宮殿のなかに塔があるというのは、どういうものなのか。一時期寺院だったという可能性はないのか。

→ 宮殿のなかに宗教施設があってもおかしくないと思うが、まだよくわからない。

・この八角形の塔については李朝なのか陳朝(仏教)なのか。

→ 李朝であることは間違いない。

・C地区の南方に八角形の建造物跡、北側にあたる部分に日本という東大寺大仏殿級の大規模な建物跡が認められている。つまり非常に巨大な塔と建築物が並んでいる地区である。これら建造物をどう考えるかは今後の大きな課題である。

・しかし、その間にも遺構自体が壊されてしまう可能性があるのではないか。

→ その通りで、もっと大きな緊急的問題となっている。

・現在ベトナム側がおこなっている国会議事堂建設予定地の発掘調査については、日本では5年計画で行われるような発掘調査を半年で行われようとしているのが現状である。

・ユネスコは関与しているのか。

→ この地区については関与していない。しかし、ユネスコ関係者が現地を訪れたり、世界遺産登録関係で関与したりはしている。

4. その他

事務局よりお知らせ:7月18日にコンソーシアムの第3回研究会を開催する。今回は、文化遺産保全に係わる国際的な場で議論されている情報を会員間で共有するためのワークショップであり、世界遺産会議や、イコモス総会などの内容をご紹介いただく予定である。まだ1つ発表枠がのこっているため、何か提案があったら事務局までお願いしたい。

- ・ これは定期的に行う予定の研究会なのか。
- まだ、未定であるが、今後の様子を見る。

以上